

話し言葉トルコ語における述辞後続要素： コーパス分析ノート¹

川口 裕司

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

要 旨

本稿では2009年12月にイスタンブールの国立マルマラ大学人文学部で録音した23個の自然談話(約76000語)をコーパスとして、述辞に後続する要素を詳細に調べ、話し言葉トルコ語における述辞後続要素について記述的分析を行った。結果として、述辞後続要素の背景(background)機能を確認したが、その他の談話機能についても指摘することができた。

1. はじめに

類型論等の書において指摘されるように、トルコ共和国で使用される現代トルコ語（以下ではトルコ語と称す）はSOVタイプの言語である。² このことが事実の一面を表していることは間違いない。主辞、述辞、目的辞の順序付けについて、支配的に用いられる文タイプという観点に立って、トルコ語を巨視的に観察した場合は、基本語順はSOVと見なすことができる。しかしながら、たとえばトルコ語の代名詞主語は義務的ではなく、SOV語順でない語順はしばしば観察される。トルコ語の語順研究に本格的な道を標したと言える Eser Emine ERGUVANLI の *The Function of Word Order in Turkish Grammar*, University of California Press, 1984 の序論は次のように述べる。

In terms of word-order typology, Turkish has been and is correctly classified as a rather rigid SOV language; that is, given this fact about Turkish, we can to a great extent predict the constituent order in certain constructions. Frequently, however, the sentence structure in the language (both written and spoken), differs from the canonical SOV order. (ERGUVANLI, 1984, 2)

¹ 本研究におけるトルコ語自然会話の録音は、基盤研究(A)課題番号19202015「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(研究代表者 川口裕司 期間 平成19年～平成22年)の補助を受けた。本テーマに関する最近の研究については、メルシン大学の Yeşim AKSAN 准教授と Mustafa AKSAN 教授から有意義な教示を受けることができた。

² GÖKSEL & ÖZSOY (2003) 1144: Turkish is an SOV language with permutations to this basic order also being allowed. もっとも KORNfilt はトルコ語が自由な語順の言語であると述べている。KORNfilt (2005) 163: Turkish is known to be a free word-order language. 筆者にはむしろ KILIÇASLAN のほうがより現実的であるように思える。KILIÇASLAN (2004) 717: Turkish is a very flexible language in terms of word order variations.

また Dan I. SLOBIN は大人が述べた約 500 の発話と 2-3 歳児 14 名のそれぞれ 100 個の発話を分析して、表 1 のような様々な語順をみつけた。³

表 1 トルコ語の文タイプ

文タイプ	幼児	大人	語順タイプ
SOV	46 %	48 %	動詞に後続する S,O なし 幼児 53%, 大人 56%
OSV	7 %	8 %	
SVO	17 %	25 %	動詞に後続する S,O あり 幼児 47%, 大人 44%
OVS	20 %	13 %	
VSO	10 %	6 %	
VOS	0 %	0 %	

表 1 から明らかなように、トルコ語の主要な語順は動詞を中心として大きく 2 つのタイプに大別される。①動詞に主辞や目的辞が後続しないタイプ(SOV, OSV)と、②動詞の後に主辞かつ（あるいは）目的辞が後続するタイプ(SVO, OVS, VSO, VOS)である。興味深いことに、SLOBIN の分析では動詞に後続する主辞と目的辞があるかないかで、2 つのタイプの出現率はおおよそ 2 分されることがわかる。表 1 の語順タイプの欄を参照。

このように動詞を主軸として、その両側での主辞・目的辞の配置を分析することはもちろん重要である。しかしながら、目的辞以外の統語機能を担う他の要素（たとえば与格、所有格、位置格、手段格等で表示される項）、あるいは副詞や接続詞等の類が、動詞に後続することはあるのかないのか、これも劣らず重要である。本稿では述辞に後続する要素を詳細に調べることで、話し言葉トルコ語における述辞後続要素の一般的な傾向を理解する。

ところで伝統的なトルコ語学では、上記の SOV 語順から外れた文のことを *devrik cümle* 「倒置文」と呼ぶ。DİZDAROĞLU は倒置文を次のように定義した。

Yüklemi sondan öne alınmış yargılı anlatıma **devrik tümce** denir.

Yüklemin sonda bulunmamasına bakarak devrik tümceyi «kuralsız tümce», «yanlış tümce», «bozuk tümce» sanmamalıdır. Devrik tümce, düz tümce gibi, bir anlatım türüdür; belirli bir düzeni ve kuralları vardır.

Kaldı ki, devrik tümce, Türkçenin yabancıası değildir. Yapılan araştırmalara göre, yinelemeler dışında, *Oğuz Kağan Destanı*’nda 4, *Orhun Yazıtları*’nda 2, *Dede Korkut Kitabı*’nda 61, *Kabusname Çevirisi*’nde 273, *Aşıkpaşazade Tarihi*’nde 165 devrik tümce bulunmaktadır. (DİZDAROĞLU, 1976, 250)

述辞が末尾から前方へ持ってこられた述定文は倒置文(*devrik tümce*)と呼ばれる。

述辞が末尾に見つからないからと言って、倒置文を「不規則文」、「誤文」、「くずれた文」と考えてはならない。倒置文は規則文(*düz tümce*)のように、文の種類の 1 つ

³ ERGUVANLI (1984) 2 からの間接的引用。Dan I. SLOBIN and Thomas G. BEVER (1982) も参照。

である；その明確な体系と規則がある。

さらに倒置文はトルコ語に異質のものではない。行われた調査によると、繰り返しを除き、Oğuz Kağan Destanı に 4 例、Orhun Yazıtları に 2 例、Dede Korkut Kitabı に 61 例、Kabusname の翻訳に 273 例、Aşıkpaşazade の歴史に 165 例の倒置文が見つかる。

上記の定義の中で、DİZDAROĞLU が「倒置文を「不規則文」、「誤文」、「くずれた文」と考えてはならない。」と言っている点は注目すべきであろう。倒置文をそのように捉える考え方が何らかの影響を及ぼした結果であろうか、伝統文法で倒置文に触れていない著作はほとんどないにも拘わらず、トルコ語学者は長らく倒置文を本格的な言語分析の対象にしてこなかった。伝統文法書としてしばしば引用される Tahir Necat GENCAN の文法書は、倒置文を「述辞が末尾に現れない文」と定義しながらも、「とりとめのない会話における文 GELİŞİGÜZEL KONUŞMALARDA TÜMCE」という表題のもとに説明し、とりとめのない会話では、単語の順序は思考や意味の現れる順序に従うと述べている。⁴ そもそも倒置文 (devrik cümle) の対極にあるとされる規則文 (düz cümle あるいは kurallı cümle) という名称にしてからが、倒置文を規則的な文でなく、例外的な文と見なしているように思える。しかし実際は、こうした文法書等の説明を待つまでもなく、トルコ語に接する者なら誰でも、述辞の後に頻繁に他の要素が現れることを知っており、実際の発話では基本語順 SOV は一体どのようになっているのか、素朴な疑問を抱くに違いない。ところが残念なことに、その答えを明確に示してくれる研究は今のところ 1 つもない。話し言葉に対するこうした偏見を孕んだ見方は、何もトルコ語に限ったことではなく、それが話し言葉に関する言語分析の発展を阻害してきたのである。たとえば話し言葉フランス語研究の先駆者であった Claire BLANCHE-BENVENISTE は次のように述べている。

Le préjugé est très fort: pour qui n'a pas une longue expérience de l'oral (ou des textes anciens écrits sans ponctuation): les productions orales seraient dépourvues de grammaire et ne seraient organisées que par des enchaînements discursifs assez flous. Il serait donc indispensable de les amender avant de pouvoir les analyser. BLANCHE-BENVENISTE (2005) 49.

偏見はとても強い。口頭言語（あるいは句読点のない古い文献）に十分な経験のない者にとっては、口頭の発出は文法を欠き、かなり曖昧な談話的連鎖によってのみ組織化されるのである。したがって分析を行なえるようにする前に、それらを修正することが不可欠になるようだ。

⁴ Gelişigüzel konuşmalarda an, düzenle uğraşmayı gerekli saymaz, uğraşmaz. Onun için bu tür konuşmalarda söcüklerin sıralanışı, düşüncelerin, anlamların doğuş sırasına göre olur. GENCAN (1979) 114.

2. 述辞と情報構造

トルコ語学では、主題 (topic)、焦点 (focus)、背景(background)という三つの基本的な情報構造と統語論の関係を、述辞を中心とする位置関係として説明する。⁵ 図1のように主題は発話頭に現れることが多く、述辞直前には焦点が置かれ、述辞の後には背景要素が来る。



図1 統語論と情報構造

しかしながら最近の研究では、むしろ情報構造と統語的位置のこうした直接的な結びつきは疑問視される傾向にある。たとえば KILIÇASLAN は、トルコ語における情報構造と統語論について、「トルコ語は文要素の情報的地位を示すために、いかなる統語的な方略も用いない」と主張する。⁶ 実際、主題が発話頭に来ない発話は多く、述辞直前の位置は発話の焦点の指定席ではない。同じことは述辞後の位置についても言え、そこに必ず背景化された要素が現れるわけではない。

たとえば ERKÜ は ERGUVANLI (1984)を批判して、主題が必ずしも発話頭に現れるとは限らないと主張する。

A: Murat nerede? 「ムラトはどこ？」

B: Galiba Murat okula gitti. 「たぶんムラトは学校へ行ったよ」

この場合、B における主題は明らかに Murat であって、発話頭の galiba 「たぶん」ではない。⁷

A: Kitabı kim okudu? 「その本を誰が読んだの？」

B: Ahmet okudu kitabı. 「アフメットが読んだんだ、その本を」⁸

B における kitabı は主題であるが、発話末に移動している。発話の焦点についても同様に、焦点要素はいつも述辞直前に現れるわけではない。

⁵ KILIÇASLAN (2004) 718 参照。背景(background)の代りに、tail という用語を用いる研究者もいる。また、ここでは触れないが、İŞSEVER は VALLDUVÍ (1990)の理論に基づいた情報構造の枠組みを提示した。İŞSEVER (2003) p.1028 を参照。情報構造の用語や概念については、必ずしも研究者の間に合意が見られるわけではない。HOFFMAN (1995) 129 以下参照。

⁶ KILIÇASLAN (2004) 754: “Turkish does not employ any syntactic strategy to mark the informational status of a sentence element” (...).

⁷ ERKÜ (1983) 108 の例。

⁸ ERKÜ (1983) 136. kitabı は A と B のいずれの文においても主題であり、そのため「その本について言うと」と言い換えることができる。

A: Bahçede kim bir köpek gördü? 「庭で誰が（一匹の）犬を見たの？」

B: Bahçede **Oya** bir köpek gördü. 「庭でオヤが犬を見た」

C: *Bahçede bir köpek **Oya** gördü.

D: *Bir köpek bahçede **Oya** gördü. ⁹

A の疑問に対する答えは B しかあり得ない。その場合、疑問の対象（＝誰が）に対する答え、すなわち発話の焦点となる新情報 **Oya** は、述辞の直前に現れない。述辞の直前に現れた C と D は、容認できない発話になってしまう。述辞後の位置も背景化された要素のための位置ではない。そこに新情報となる焦点が現れることがある。

A. Kaç kişi geliyor? 「何人来るの？」

B. Üç buçuk mu demeli, bir tane de ufak çocuk. Antalyada evinde kaldığımız aile. Onlar İstanbula geldi **Bayrama**, yarın gidiyorlar.

「3 人半って言わないとね、1 人は小さな子だから。アンタリヤで家に泊めてもらった家族よ。彼らはイスタンブールに来たの、お祭りに、明日帰るわ」¹⁰

この例では、「お祭りに **Bayrama**」来たことは 2 次的なことであって、発話者の伝えたい一番重要な情報は、「イスタンブールへ İstanbula」来たことだった。そのため新情報でありながら、**Bayrama** は述辞 geldi よりも後に移動したのである。

GÖKSEL と ÖZSOY は、述辞の直前は焦点の位置ではないと考える。彼らによれば、そもそも焦点化は focal accent と呼ばれる高さアクセントによって実現される。従って焦点化された要素は述辞の直前だけでなく、述辞より前のあらゆる位置に出現すると主張する。¹¹

以上のように、この問題は研究者によって様々な意見と仮説があり、統語的位置と情報構造の関係は単純ではない。本稿の目的は、統語的位置と情報構造のそうした関連性を分析することではない。ここでは、述辞の後の位置だけに焦点を絞って、実際の談話コーパスを分析する。先にも述べたように、統語的位置と情報構造の議論のほとんどは、主辞と述辞と目的辞（直接目的、間接目的、状況補語）等に関するものである。また研究のほとんどは、語順を適当に入れ替えてみて、その発話の容認可能性を母語話者の直観によって判断するという手法を実践している。重要な先行研究 ERKÜ (1983), ERGUVANLI (1984), KORNfilt (1997), GÖKSEL & ÖZSOY (2000), (2003), İŞSEVER (2003), KILIÇASLAN (2004), GÖKSEL & KERSLAKE (2005), NAKİPOĞLU (2009) の全てが同様の手法をとっている。先にも述べたように、その方法をとる限り、現実の発話で述辞に後続する要素がどのようなもので、後続しない要素が何なのかは知り得ない。これらの先行研究に対して、本稿はあえて愚直とも言える手法を採用し、述辞の後に現れうる要素について、自然談話の客観的観察に基づいた記述的分析を行う。

⁹ KILIÇASLAN (2004) 721.

¹⁰ ERGUVANLI (1984) 63.

¹¹ GÖKSEL & ÖZSOY (2000), (2003).

3. コーパス

本稿が分析の対象とするトルコ語話し言葉コーパス（以下、コーパス 2009 と略す）は、2009 年 12 月にイスタンブールの国立マルマラ大学人文学部で筆者と現地協力者¹² が録音した 23 個の自然談話である。会話の長さ、単語数、テーマ、話者情報は表 2 のようになる。

表 2 コーパス 2009

データ	サイズ (単位 分)	延べ語数	テーマ	話者 1	性別	話者 2	性別
001	39:39	6458	職業問題	HD	女	SA	男
002	18:27	2782	学部について	HD	女	SA	男
003	1:03:14	5739	論文の評価	ZO	男	SA	男
004	15:32	2226	准教授問題	BY	男	SY	男
005	11:06	1627	海外生活 1	AD	男	AA	女
006	16:34	2939	海外生活 2	AD	男	AA	女
007	20:18	3652	休日	AD	男	AA	女
008	16:32	2213	音楽	MC	男	IY	女
009	18:36	2331	翻訳	MC	男	IY	女
010	11:59	1417	研究について	BY	男	MÖ	男
011	17:18	2419	学習塾経営	BÖ	男	ZS	男
012	21:32	2858	外国語	BÖ	男	ZS	男
013	23:35	3710	豚インフルエンザ	AB	男	SP	男
014	21:38	1911	教育について	BS	男	YA	男
015	21:33	2215	出版に関して	BS	男	YA	男
016	21:24	3275	直訳について	NE	女	ES	女
017	20:19	3040	教育システム	AM	男	YA	男
018	20:26	3609	サッカー	AB	男	SP	男
019	21:38	3587	科学技術	MM	女	ÇH	女
020	20:35	3229	モード	MM	女	ÇH	女
021	36:34	5111	学問の諸問題	MÖ	男	BY	男
022	25:04	4636	学生の問題	AA	男	FD	男
023	27:36	4954	専門分野の論争	AA	男	FD	男
合計	8 時間 51 分 09	75938					

¹² マルマラ大学人文学部准教授 Selim YILMAZ 氏とイスタンブール大学文学部専任講師 Arsun URAS YILMAZ 氏の 2 名。

インフォーマントはマルマラ大学の教員 12 名，職員 2 名，学生 11 名の計 25 名であり，男性 18 名と女性 7 名であった。転写ではアルファベット表記を原則として用い，表 3 に示したタグを該当箇所につ与した。

表 3 転写規則¹³

(?), (!)	疑問，感嘆
-	談話の始まり
#, ##, ###	短い，あるいは長いポーズ
Ooo, aaa	感情的に長い母音，例 yook 「いいや」，haayır 「いいえ」
(.)	ためらい，あるいは中断
(....)	脱落した分節音
_____	アクセントの置かれた部分
e (eee)	埋め草
m (mmm)	同意
{.....}	遊離部分，例 hava güzel {bugün} = bugün hava güzel. 「今日は天気がいい」
[.....]	微笑み，笑い，咳などの言語外的要素
<.....>	重なり部分
.....	比較的早い部分
Xxx	理解不可能な部分
%.....%	特別なイントネーションやメロディ

実例を挙げて説明しておく。

AA20- [gülme] # ya İspanyolca da öğrenecez (öğreceneğiz) {seneye} onun için de ayrıca hem heyecanlıyım hem de mutluyum # sonuçta mezun olduğumuz zaman üç dilimiz olacak (olacak) {bu yaşta} ve bence çok büyük bi(r) gelişme olacak (olacak) {bu} <yaani> Türkiye gibi bi(r) yerde e bu genç yaşta üç y(.) üç dili öğrenmek # kolay değil {aslında}

AA20- [笑い] # よしスペイン語も学ぼう {来年}。そしたらもっとワクワクするし，嬉しい。 # 最後に卒業するときは 3 言語になる {この歳で}。僕的にはすごく大きな進歩だ {これは}。<つまり> トルコみたいな場所で，この若さで 3.. 3 言語を勉強するのは # 簡単じゃない {もともと}。¹⁴

¹³ 詳細については YILMAZ (2006) の pp. 202–205 を参照。

¹⁴ 読み易さを考えて日本語訳には適宜空白と句読点を入れた。

AA20 は話者 AA の 20 番目の発話という意味である。話し言葉の転写であるため、句読点は表記しない。[] は言語外的な動作を表す。ここでは笑い声[gülme]のこと。() 内の綴り字は直前の形を標準的な綴り字に直したものである。この例では öğrenicez と olucak は、いずれも話し言葉に特有の発音である。そのため直後にそれぞれ (öğreneceğiz) と (olacak) と記した。# はポーズを表す。長いポーズは## のように表記した。< > は話し相手が割り込みをした部分を表す。転写では標準的な綴り字を踏襲しつつも、できる限り発音に近づける工夫をした。たとえば, y(.) は言い間違い, あるいは単語を途中でやめてしまったことを示す。yaani は yani の最初の母音が通常よりも長く発音されたことを示す。bi(r) は bir の最終子音が脱落したことを表す。最後に, { } が本稿で問題になる述辞後続要素を示す。上例の {seneye} 「来年は」, {bu yaşta} 「この歳で」, {bu} 「これは」, {aslında} 「本来は」は、それぞれ述辞 öğrenicez 「(私たちは)学ぶだろう」, olucak 「なるだろう」, değil 「～ではない」の後に現れている。

コーパス 2009 の総語数は、タグ記号等を除くと約 76000 語である。ここであらかじめ断っておくが、本稿では上記のタグが付加された転写の中から、述辞後続要素のタグ{ }が付与された例だけを自動的に抽出し、かつタグ付けが正しくなされたと考えられる例だけを分析の対象とした。タグ付けには必然的に誤りがあり得る。また見過ごされた述辞後続要素が多くあったものと思われる。このため本稿の分析はコーパス 2009 の網羅的な分析とは言い難い。¹⁵ そのような分析は今後の機会に譲りたい。本稿は先にも述べたように、むしろ述辞の後に現れうる要素について、実際の観察に基づいた分析を行うことに主眼を置いている。さらに言えば、{ }のタグが付けられた例についても、自然談話の性質上、述辞に後続する要素であるのか、次の発話の先頭要素なのか、判断に迷う例が多々あった。比較的明瞭な実例を挙げておこう。

AD13- anlaşılacak şekilde vee gaayet de iyi konuşuyo(r) <zaaten şey olabilir(.)> Fransızca yazmasını bilmiyo(r) {ama} <evet>

AD13- 理解できるような形で、それにとっても上手に話すんだ。<そりゃあれかも> フランス語は書けない {けどね}。<うん>

ES35- (...) ## Fransızlar böyle mi (?)¹⁶ # hani bilmiyorum tam olarak yaşantılarını ben de bilmiyorum {ama} # hani şimdi bildiğimiz kadarıyla # hani ne biliyim belki hobileri vardır (...)

ES35- (...)## フランス人ってこんななんですか(?) # いや判りません。ちゃんと彼らの生活を知らない {ですけど} # ただ、いま私たちが知っている限りでは # わからないですけど、たぶん彼らにも趣味はあります(...)

¹⁵ 全ての転写はトルコ人の研究協力者 1 名が表記とタグ等を確認しているが、十分とは言い難い状況であり、さらに詳細にわたる校正作業が必要であることをつけ加えておく。

¹⁶ (?) は疑問等によるイントネーションの上昇を表す。

NE45- (...) ## hani mesela düşün bizim ülkemizde de çok önemli çok ünlü yazarlar var {ama}
sonuçta yurtdışında da çok iyi yazarlar var

NE45- (...) ## でも、たとえば考えてみなよ。この国でもすごく重要ですごい有名な作家がいる {けど} 結局は海外にもすごくいい作家がいる。

最初の例では、接続詞{ama}が AD の発話末尾に現れ、会話相手 AA の発言 <evet>によって AD の発話は終る。このような場合には{ama}が明らかに述辞 bilmiyo(r)に後続していると考えられる。2 番目の ES35 では、{ama}の後に明確な休止があり、ES の発話は一旦とぎれている。この場合にも接続詞{ama}は述辞 bilmiyorum に後続する要素であると思なすことができる。一方、3 番目の NE45 では、{ama}は発話末尾でなく、後に休止を伴わないことから、先行する述辞 var に後続するのか、sonuçta を含む次の発話の先頭に来るのか、容易に判断することができない。先にも述べたように、本稿では母語話者による直観的判断に基づいた分析を排除したいため、こうした第3の例を分析対象からできるだけ除外した。

本稿では述辞に後続する要素の最終要素に着目して分析を行う。このような分析を行った理由は 2 つある。①後続要素はしばしば 1 つではなく複数あり、②トルコ語の句構造は一般に最終要素によって統語的に規定されるためである。例を挙げておく。

AA22- evet Bursahılar daha farklı konuşuyo(r) {aslında} # mesela ne yapıyorsun yerine naa(.)
naapıyon (ne yapıyorsun) mesela <naapıyon (ne yapıyorsun)> mesela napıyo(r)sun (ne yapıyorsun) değil de naapıyon (ne yapıyorsun) geliyon mu (geliyor musun) gidiyon mu (gidiyor musun) {falan}

AA22- うん、ブルサの人はもっと違った言い方をするよ {ほんと}。# たとえば「何してるの」の代りに、 naa(.) naapıyon (ナンバシットト)、たとえば<naapıyon (ナンバシットト)> たとえば napıyo(r)sun (何してるの)ではなくて、naapıyon (ナンバシットト)、geliyon mu (キットト)、gidiyon mu (イットトト) {みたく}。

ÇH28- kesinlikle # ve ben de düşünmüyorum {aslında ileride evime televizyon almayı} #

ÇH28- 絶対 # 僕も考えてないよ{実際、後で家にテレビを買うなんて} #

上の例に見られる副詞 *aslında* は、いずれも述辞に後続する要素であるが、その現れ方は全く異なる。最初の例では *aslında* は述辞 *konusuyo(r)*に後続し、意味的にも述辞あるいは直前の部分全体と関わりがある。他方 2 番目の例では、*aslında* だけでなく、*ileride* および *almayı* も述辞 *düşünmüyorum* と統語的な関係を持つ。しかし統語的な関係は明らかに階層化されており、述辞に対して最も重要な統語関係を担っているのは *almayı* であることが分かる。たとえば一連のゼロ要素との置換テストによってそのことを確認できる。

元の発話

→ ben de düşünmüyorum {**aslında ileride evime televizyon almayı**}

aslında をゼロと置換

→ ben de düşünmüyorum {**ileride evime televizyon almayı**}

aslında と ileride をゼロと置換

→ ben de düşünmüyorum {**evime televizyon almayı**}

aslında, ileride, evime をゼロと置換

→ ben de düşünmüyorum {**televizyon almayı**}

evime, televizyon, almayı をゼロと置換

→ *ben de düşünmüyorum {**aslında ileride**}¹⁷

aslında, ileride, televizyon, almayı をゼロと置換

→ *ben de düşünmüyorum {**evime**}

aslında, ileride, evime, almayı をゼロと置換

→ *ben de düşünmüyorum {**televizyon**}

上例では結局のところ、televizyon almayı だけが述辞にとって必須要素であることがわかる。述辞に後続する諸要素の分類基準として、複数要素のうちの最終要素（以下、述辞後続要素あるいは単に後続要素と称する）に注目したのはこのためである。上記の場合、述辞後続要素とは televizyon almayı の末尾にある直接限定目的辞-yı を意味する。

以上のような手続きを踏んだ上で、最終的に分析の対象となった述辞後続要素は、238 の異なる語からなり、その出現総数は 566 であった。

4. コーパス分析ノート

最初にコーパス 2009 で観察された述辞後続要素の全体像を提示する。¹⁸ 述辞後続要素として最も頻繁に現れるのは副詞であり、次に接続詞、位置格、与格、直接限定目的格、主語代名詞、主語名詞句、後置詞が続き、この 1～8 の要素で全体の 84.98%を占める。表 4 と図 2 を参照。

¹⁷ * は非文法的あるいはあり得ない発話であることを表す。

¹⁸ 本稿で用いている品詞分類と用語法は確定的なものではない。それは現行の幾つかの分類タイプの 1 つに過ぎない。

表 4 述辞後続要素の延べ語数

	token	%		token	%
1. 副詞	149	26.33%	8. 後置詞	34	6.01%
2. 接続詞	68	12.01%	9. 呼びかけ	22	3.89%
3. 位置格	61	10.78%	10. 手段格	19	3.36%
4. 与格	47	8.30%	11. 所有格	17	3.00%
5. 直接限定目的格	45	7.95%	12. 間投詞	14	2.47%
6. 主語代名詞	40	7.07%	13. 動名詞	7	1.24%
7. 主語名詞句	37	6.54%	14. その他	6	1.06%

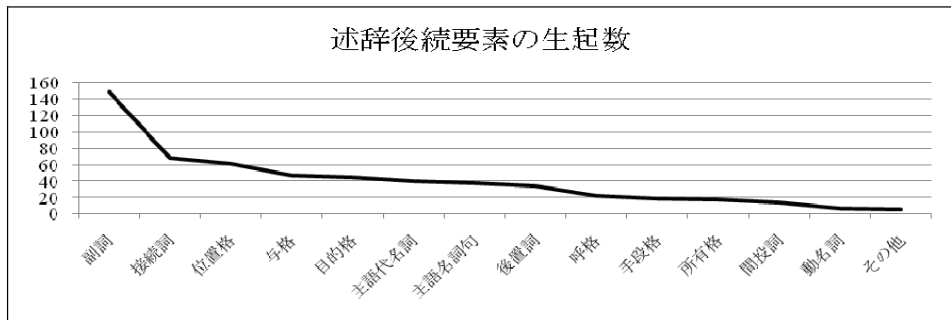


図 2 述辞後続要素の頻度曲線

それぞれの要素における延べ語数(token)と異なり語数(type)の関係はどうなっているのだろうか。TTR(Type/Token Ratio)は延べ語数が増大すれば、それだけ低い値になるため、複数のテキスト間で両者の関係を比較する場合には、異なり語数を延べ語数の平方根で割った値、いわゆる Guiraud 値が一般に用いられる。コーパス 2009 は他に参照するコーパスを持たない単独のコーパスであるが、Guiraud 値を算出してみると表 5 のようになる。

表 5 述辞後続要素における語彙的多様性¹⁹

	Guiraud 値	token	type	後続要素	Guiraud 値	token	Type
1. 直接限定目的格	4.92	45	33	8. 呼びかけ	1.92	22	9
2. 与格	4.81	47	33	9. 動名詞	1.89	7	5
3. 副詞	4.10	149	50	10. 後置詞	1.54	34	9
4. 手段格	3.44	19	15	11. 主語代名詞	1.11	40	7
5. 所有格	3.40	17	14	12. 接続詞	0.73	68	6
6. 位置格	3.33	61	26	13. 間投詞	0.53	14	2
7. 主語名詞句	3.12	37	19	14. その他	1.22	6	3
				合計		566	238

¹⁹ 格接尾辞と動名詞は語彙的要素ではなく接辞であるため、それらの token および type は接辞に先行する要素を含む。たとえば aramız-a「我々の間-に」では aramız, beklediğimizi「私たちが待つことを」では不定詞 beklemek のことである。また名詞句 çocuk「子ども」と çocuk-lar「子ども-たち」は同一の type として分類した。

個々の後続要素については以下で詳しく検討することにして、語彙的多様性という観点から、とくに際立った差として指摘できるのは、副詞と接続詞と位置格である。延べ語数はそれぞれ 26.33%, 12.01%, 10.78%と高頻度であるが、Guiraud 値は 4.10, 0.73, 3.33 となり、接続詞の Guiraud 値が著しく低い。すなわち接続詞では語彙的多様性が低く、同一の語彙要素が繰り返し用いられていることがわかる。他方、直接限定目的格と与格は延べ語数がそれほど高頻度ではないものの、語彙的多様性が高い。与格と直接限定目的格の前では様々な語彙的要素が使用されているのである。以下では、延べ語数が多かった要素から低い要素へと順に、コーパス 2009 における述辞後続要素の実態を記述する。

5. 分析結果

5.1. 副詞

ERGUVANLI (1984)も指摘したように、副詞は述辞に後続する。コーパス 2009 では副詞の生起数が最も多い。彼女によれば、文副詞(*artık, belki* 等)や時間や様態を表す副詞がとくに述辞後続要素として頻度が高いということである。²⁰ しかし新たに 3 種類の副詞を付け加える必要があると思われる。

1 つは先行する内容の真実性を補強すると考えられる一連の副詞、*açıkçası* 「はっきり言う」と (11), *aslında* 「ほんとうは」 (17), *esasında* 「もともとは」 (3), *gerçekten* 「本当に」 (5), *hakikaten* 「真に」 (2)等であり、コーパス 2009 ではこれらが文副詞とともに頻度が高い。以下 () 内は出現回数を表す。表 6 を参照。

表 6 副詞

用法	token	Type
1. 文副詞	42	<i>artık</i> (5), <i>belki</i> (5), <i>herhalde</i> (5), <i>sanki</i> (3), <i>zaten</i> (8), etc.
2. 真理	41	<i>açıkçası</i> (11), <i>aslında</i> (17), <i>esasında</i> (3), <i>gerçekten</i> (5), <i>hakikaten</i> (2), etc.
3. 時間	25	<i>birbirinden</i> (1), <i>-ken</i> (2) ²¹ , <i>sonra</i> (2), <i>şimdi</i> (2), <i>zaman</i> (6), <i>zamanda</i> (2), etc.
4. 見解	14	<i>bence</i> (12), <i>kanımca</i> (1), <i>sence</i> (1)
5. 例示	14	<i>mesela</i> (14)
6. 量	12	<i>biraz</i> (7), etc.
7. 場所	1	<i>aşağı</i> (1)
合計	149	()内は生起数

²⁰ ERGUVANLI (1984) 63.

²¹ *-ken* は動詞に接辞する副動詞形であるが、ここでは意味的に時間を表す副詞と同等とみなした。同じことは *zamanda* の位置格 *-da* についても同様である。

たとえば以下のような例である。

HS142- (...) # ben o yüzden buraya indim {açıkçası}²²

HS142- (...) # 僕はだからここへ降りたんだ {はっきり言うとな}

AA20- (...) # kolay değil {aşlında}

AA20- (...) # 簡単じゃない {ほんとは}

MM27- (...) # ama kullanmak zorunlu mu {gerçekten} (?)

MM27- (...) # でも使わないといけないの {ほんとは} (?)

2 つ目は「視点 point of view」と名づける研究者がいる要素で、述辞を含む先行部分²³に、発話者ないしは他者の視点を付与するために用いられる副詞, bence「私によれば」(12), görüşü「見方では」(1), kanımca「私の考えでは」(1), sence「君によれば」(1)等である。

ES27- (...) ## bunları anlamak gerçekten hani ee ## bizim boynumuzun borcu {bence}

ES27- (...) ## これらを理解するのは本当にえ〜と ## 我々の義務だ {僕によれば}

BY1 - (...) ee bunlara bunlara bi(r) düzen getirilmesi gerekiyo(r) {kanımca} #

BY1- (...) え〜と, これらをこれらを整理する必要があるね {僕の考えでは}

IY6- (...) evet peki bu çeviri öğretilen bi(r) şey mi ya da e öğrenebileceğimiz bi(r) şey mi {sence} (?)

IY6- (...) ええ, それでこの翻訳って教えることができるものなの, それとも学ぶことができるものなの {君の考えだと} (?)

そして3 つ目は例示を表す mesela「たとえば」(14)である。

NE43- (...) # Türkçeye de Fransızcadan geçen kelimeler var {yani ee kariyer gibi mesela}

NE43- (...) # トルコ語にもフランス語から来た単語がある {つまりえ〜と kariyer (= carrière)みたいなたとえば}

NE43 は典型的な例示と言える。これら3 つの述辞後続要素に共通しているのは、述辞を含む先行部分の意味を後から補足したり、話者の発言への関わり方を後で付け足すというこ

²² ポーズがある場合でも açıkçası は意味的に明らかに前接的と考えられる。

²³ 発話の焦点が現れることが多い述辞直前の要素と述辞を指す。

とである。述辞に後続する副詞は発話の中心部分に情報を追加すると考えられる。²⁴ 副詞部分が付加的情報であることは、この部分が発話成立のために必須の要素でないことから説明される。たとえば上例 HS142, BY1, NE43 はいずれも述辞後続要素 {açıkçası}, {kanımca}, {yani ee kariyer gibi mesela} なしで発話として成立つ。

HS142- (...) # ben o yüzden buraya indim
BY1 – (...) ee bunlara bunlara bi(r) düzen getirilmesi gerekiyo(r)
NE43- (...) # Türkçeye de Fransızcadan geçen kelimeler var

とはいうものの発話の必須要素ではなく省略可能であることは必ずしも二次的な情報であるとは限らない。なぜならば上述の 3 つの働き、①発話に真実性を付与すること、②話し手の視点や見解を明示すること、③述辞を含む部分について具体的な例を示すことは、単なる発話の背景的情報と見なすことはできない。これらは当該発話に新たな情報提供を行っているか、あるいは少なくとも関連する情報による発話内容の補強と考えられる。

5.2. 接続詞，位置格

述辞後続要素としての接続詞は表 7 のようになる。現れにはかなり偏りがあり，yani だけで 70.59%を占める。ただ先にも述べたように，yani 等のタグ付けは完全と言うには程遠く，詳細に確認すれば yani の生起数はさらに多くなろう。

表 7 接続詞

	token	%	Type
1. yani	48	70.59%	aslında yani (2), ben yani (1), yani (42), etc.
2. de	10	14.71%	bu defa da (1), belki de (1), ben de (1), orada da (1), etc.
3. ama	7	10.29%	ama (7)
4. その他	3	4.41%	çünkü (1), hatta (1), yoksa (1)
合計	68		

接続詞 de については GÖKSEL & ÖZSOY (2003)の優れた研究がある。彼女たちは焦点化された de とされない de の 2 種類を区別し、前者は述辞に後続することはないと述べている。²⁵ 焦点化されるとは高さアクセントをもつという意味であるが、コーパス 2009 の例を調べた限りでは、全て無強勢であると考えられる。

²⁴ “The types of constituents that are most commonly backgrounded are definite noun phrases and adverbials.” GÖKSEL and KERSLAKE (2005) 399. 以下の一連の研究がある。ERGUVALI (1984) , HOFFMAN (1995) , KURAL (1997) , GÖKSEL (1998), KORNFIET (2000) , KILIÇASLAN (2004) 727-729.

²⁵ GÖKSEL & ÖZSOY (2003) 1148.

AA82- onlar da öğretirken öğreniyorlar {belki de}

AA82- 彼らも教えながら学んでいるんだ {たぶんね}

AA141- evet korkunç bi(r) hızlı düşüş var {or(a)da da}

AA141- ああ、驚くほど（周波数は）²⁶ 急に下がるんだ {そこでも}

AD20- a evet onu söylecektim (söyleyecektim) {ben de}

AD20- あ、うん、それを言いたかったんだ {僕も}

ZO236- böyle koyalım {bunu da}

ZO236- こうやって入れよう {これも}

de の意味論的・語用論的機能は一般に 5 つある。①付加，②焦点化，③主題化，④発話の連結，⑤強調である。²⁷ 上の例はいずれも情報の付加ないしは発話の連結として解釈できよう。AD20 は a evet *ben de* onu söylecektim という de によって主題化された *ben* が述辞の右側に移動した例である。もちろん述辞に後続することで主題化の働きは背景化している。AA82 と AA141 は、いずれも文頭にあった副詞的要素 *belki* 「たぶん」、*or(a)da* 「そこで」が、述辞の後に移動したもののだが、単に背景に押しやられたというよりも、主題部から切り離されたことで、かえって主題部分に焦点を絞り、ズームインしているように感じられる。最後の ZO236 は *böyle bunu da* koyalım の de によって焦点化した直接目的語 *bunu* を述辞の後に持ってきたものである。GÖKSEL & ÖZSOY (2003) も指摘するように、焦点化した de は発話のどの位置にも現れることができる。²⁸

表 8 位置格

-de/da/ta	token	-de/da/ta	token
1. sonuçta	8	8. içerisinde	2
2. Türkiye’de	8	9. içinde	2
3. bu konuda (5), her konuda (1), bu konularda (1)	7	10. normalde	2
4. o şekilde (2), şekilde (4)	6	11. okulda, okullarda	2
5. burada	3	12. sayede, sayesinde	2
6. orada	3	13. その他	14
7. çeviride, çevirisinde	2	合計	61

²⁶ () は川口が補った内容。

²⁷ GÖKSEL & ÖZSOY (2003) 1144.

²⁸ GÖKSEL & ÖZSOY (2003) 1148.

表 8 は位置格-de/-da/-ta が後続する述辞後続要素を示す。純粹に位置を表す例, Türkiye’de 「トルコで」, burada 「ここで」, okulda 「学校で」, orada 「そこで」のほかに, sonuçta 「結局は」, bu konuda 「これについて」, normalde 「普通に」, sayede, sayesinde 「おかげで」, o şekilde 「そんな風に」のように, 接続詞あるいは副詞のような機能をもった表現がある。これらは補足的情報を発話に付与しており, 当該発話の必須要素ではない。以下の文では { } を除いたとしても発話は成立する。

ES18- (...) ya sen ne düşünüyö(r)sun {**bu konuda**} (?)

ES18- (...) で君はどう思う {これについて}

AA55- (...) hani yaz tatilini herkes sever {**normalde**} #

AA55- (...) そう夏休みは皆好きさ {普通}

AA22- (...) ya çok güzel bi(r) şey Türkiye # gittikçe gelişiyo(r) {**yaani bu sayede**}

AA22- (...) 素晴らしいことだ, トルコは # どんどん発展してる {このおかげでね}

5.3. 与格, 直接限定目的格, 主語代名詞, 主語名詞句

表 9 与格

-(y)e/a	token	type
1. 代名詞	17	bana (6), bize (1), kendime (1), ona (2), sana (6), size (1)
2. 無生物名詞	13	araya (1), dile (1), duruma (1), kanala (1), etc.
3. 生物名詞	7	insanlara (1), Türklere (1), yanıma (1), yanına (1), etc.
4. 場所	5	buraya (3), ortaya (2)
5. 不定詞・動名詞	4	gelmesine (1), öğrenmeye (1), seçtiğime (1), uymaya (1)
6. 時間	1	seneye (1)
合計	47	

表 9 から判るように, 述辞に後続し, かつ与格をもつ要素のうちで頻繁に現れるのは, 代名詞と無生物名詞および生物名詞である。一般にこれらの後続要素は発話に不可欠と考えられる。

代名詞＋与格と統語的に関連づけられる述辞は, almak 「とる」(1), demek 「言う」(3), gelmek 「思える」(2), gezdirmek 「案内する」(1), göstermek 「示す」(1), katılmak 「参加する」(4), söylemek 「言う」(3), vermek 「与える」(2)である。このうちコーパス 2009 では代名詞に関して興味深い例が散見される。

SY2- # **bence** ana sorun bu gibi geliyo(r) {**bana**} <evet>

SY-2 # 僕の考えだと, 主な問題はこれのように思える {僕には} <そう>

SY4- # araştırmacı olarak bi(r) makaale gönderiyorum # yayın(.) yayınlıyorum # dosyama koyuyorum # jüri üyesi kalkıyo(r) **bana** diyo(r) ki bu dergi hakemli değil diyo(r) {bana}

SY4- # 研究者として論文を送って # 出版(.) 出版して # 書類に入れる # すると審査委員が来て僕に言うんだよ、この雑誌は査読付きじゃないって言うんだ {僕に}

これらは同一の話し手 SY の発言である。この場合 *demek* と *gelmek* は与格を要求する動詞であるが、発話では先行文脈ですでに *bence* 「私の考えでは」と *bana* 「私に」が現れており、{bana} は統語的に必須要素であったとしても、情報的には二次的で補足的であると考えられる。²⁹

表 10 直接限定目的格

-(y)i/i/u	token	例
1. 無生物名詞	24	bankayı (1), Bursa'yı (2), dergiyi (2), örneği (1), etc.
2. 代名詞	19	beni (1), bizi (1), bunu (7), kendimi (1), onu (1), seni (1), etc.
3. 生物名詞	1	insanları (1)
4. 不定詞	1	almayı (1)
合計	45	

与格と同様、直接限定目的格も名詞、代名詞、不定詞等に接続する形式であるが、コーパス 2009 では、無生物名詞が最も頻度が高く、かつ語彙的多様性も大きい。代名詞も予想以上に多く見られる。この 2 つのカテゴリーでほぼ全体に近い出現数を占める。

代名詞に与格あるいは直接限定目的格が付加されて述辞に後続することは、発話の情報構造の観点からみると、述辞後続要素が背景化(backgrounding)の機能を果たしていることと無関係ではない。一般に、代名詞は先行する文脈に現れる要素に前方照応することから、それ自体は既知情報であって新情報ではない。³⁰

これと対照的なのが不定詞である。すでに挙げた次の例では *almayı* は背景化された情報ではなく新情報と言える。³¹

ÇH28- kesinlikle # ve ben de düşünmüyorum {**aslında ileride evime televizyon almayı**} #

ÇH28- 絶対 # 僕も考えてないよ {実際に先で家にテレビを買うなんてね} #

代名詞が付加的要素であり旧情報を表していることは、述辞に後続する主語代名詞を見れば明らかである。表 11 を参照。トルコ語ではもともと主語代名詞は義務的でない。また

²⁹ ERGUVANLI (1984) 55 が類似の例を挙げている。

³⁰ 極端な立場かもしれないが、FOCUS でないものを背景(background)とする考え方もある。KILIÇASLAN (2004) 727-728: Once the focus test suffices to identify the background of the sentence. Once the focus has been identified, the background will be, by definition, all that is not in focus.

³¹ ERGUVANLI (1984) 63 に同様の例がみつかう。

主語代名詞が単独で述辞の後に現れる例は全体の 76.92% を占め、単独でない場合も asla 「決して」、aslında 「本当は」、peki 「よし」、yani 「つまり」等の発話に必須ではないと考えられる副詞³²と共起する。

表 11 主語代名詞

	token	例
1. ben	16	asla ben (1), aslında ben (1), ben (12), yaani ben (2)
2. bu	12	daha çok bu (1), bu (8), bunlar (1), peki bu (1), yani bu (1)
3. o	5	aslında o (1), o (4)
4. sen	4	sen (4)
5. その他	3	biz (1), hepsi (1), şunlar (1)
合計	40	

主語名詞句は個々に見てみると、不定詞 gitmek を除き、定名詞句と考えることができる。³³ 表 12 を参照。ただし GÖKSEL と KERSLAKE によると、最も背景化しやすいのは定名詞句と副詞類であるが、不定名詞であっても先行文脈で述べられるか暗示された実体やカテゴリーを指す場合には、述辞に後続することがある。³⁴

表 12 主語名詞句

	token	type
1. 生物名詞	14	adam (2), arkadaş (2), babam (1), çocuk (2), insanlar (1), etc.
2. 無生物名詞	16	Fransızca (2), para (1), şey (2), üniversite (1), yükler (1), etc.
3. falan	5	falan (4), hani ne o falan (1)
4. その他	2	gitmek (1), orası (1)
合計	37	

AD22- (...) Türkiye’de bi(r) tek bi(r) tane dil sınıfı vardı {**Fransızca**} <eveet>

AD22- (...) トルコでたった 1 つの語学教室があった {フランス語の} <そう>

MM23- (...) şimdi Nn(.) Nasa’dan # istediğin her türlü bilgiye gezegenler hakkında <*hı hı*> ulaşabiliyo(r)sun # gelişmek zorunda {**aslında teknoloji**} <*evet*> (...)

MM23- (...) 今や Nn(.) NASA から # 欲しいと思うあらゆる種類の知識を惑星について <フムフム>得ることができるよ。# 発展する必要がある {実際テクノロジーは} <そうだね> (...)

³² 本論の 5.1. を参照。

³³ 一般に不定名詞は述辞に後続できない。ERGUVANLI (1984) 45: Indefinite NPs (and non-referent DOs) cannot occur after the predicate.

³⁴ GÖKSEL and KERSLAKE. (2005) 399.

AD22 と MM23 の発話においても外国語の授業や NASA の話がテーマになっていることから、{ } で示される要素は先行文脈においてすでに含意されていると考えられる。

MM40- (...) diğer arkadaşım da dedi ki # e hazır siyah giymişsin git işte nolucak (ne olacak)
<[gülümseme]> ya var mı {böyle bi(r) mantalite (mentalite)} (?) (...)
MM40- (...) 他の友達も言ったんだ。# え〜と既製の黒服を着て行きな、そしたらどう
なるだろ<[笑い]>あるかな {こんなメンタリティー} (?) (...)

MM40 は興味深い例である。トルコ語では bir+名詞は不定名詞を表すことがあるが、ここでは bir mantalite は指示対象が明確に存在しないという意味で不定(indefinite)とすることができる。しかしながら実際には話の中で話題になっているモードについてのメンタリティーを意味しており、明らかに特定(specific)である。そのため述辞に後続することができる。この名詞が指示しているのは特定の指示対象ではなく、ある種のカテゴリーである。
şey「もの、こと」や falan「みたいなもの、こと」は、さらに特定性が曖昧な対象を指す。

AA19- (...) # ama bu kadar basit diil (değil) {her şey}
AA19- (...) # でもこれほど単純じゃない {どれも}

BY5- # sanayide çalışan insan akademisyen olmak istiy(o)r(sa) başvurabilir # işte dışar(ı)dan
doktorasını yapmıştır işte doçent olucaktır (olacaktır) {falan}
BY5- # 企業で働いている人が学者になりたい場合も出願できて # 海外で博士号を取
ってるようなら、准教授になるだろう {みたく}

5.4. 後置詞，呼格，手段格，所有格等

最後に頻度があまり高くなかった他の要素についても結果を示しておく。まず後置詞は表 13 のようになる。ここでは幾つかの例を挙げて、述辞に後続する後置詞句の特徴を見ておく。

表 13 後置詞

	token		token
1. için	11	6. göre	2
2. gibi	6	7. hakkında	2
3. olarak	6	8. kadar, rağmen	2
4. tarafından	3	合計	34
5. diye	2		

SA11 と AA15 では直前の文脈にすでに同じことが述べられており、2 度目に同じ事を言う

場合に、述辞後続要素になっている。後置詞句はいわば後から思いだして付け足した内容のように思える。³⁵

SA11- # ama bundan sonrasında bundan sonrasında diğer arkadaşlar için gerçekten üzülüyorum yaani ünivers(i)tede okumuş adamlar ge(.) s(.) sizin dediğiniz gibi yaani her şeyiyle # karşıda olsun burası olsun önemli diil (değil) # ama çok üzülüyorum {arkadaşlar için}

SA11- # でも今後も、今後もほかの皆のことがほんと心配だ、だって大学で勉強した人たちが、ge(.) s(.) 君が言うように、つまり専門性などは # どのようであれ重要ではなく (仕事が見つからない) ³⁶ # とても心配だ {皆のことが}

AA15- zaaten tercümanlık şöyle bi(r) şey ee hem dili çevirdiğin ee # <hem de o kültürü çeviriyo(r)sun {aynı zamanda}> kültürü çeviriyo(r)sun {aynı zamanda dediğim gibi}

AA15- 元来翻訳ってそんなものさ。え〜と、言葉を翻訳し、え〜と # <それに文化も翻訳するよね {同時に}> 文化を翻訳するんだ {同時に、言いたみたいに}

他方、統語的な要因によって後続要素あるいは先行要素になったと考えられる例がある。

SP77- bu domuz gribi Amerikalar tarafından verilmiş bi(r) şey diye bu da bi(r) psikolojik savaş ayriyeten bu bi(r) psikolojik savaş yani (.)

SP77- この豚インフルエンザはアメリカ人によってもたらされたものらしく、これも心理戦、つまりこれは心理戦争なんだ(.)

MÖ1- # elektronik olarak # izlenebilecek bir ee seviyeye getirildi # {yaani Çevre Bakanlığı tarafından} <hı hı>

MÖ1- # 電子的に # 追跡されうる、え〜とレベルに持って行かれた # {つまり環境省によって} <ふむふむ>

SP77 では受動動詞「与えられた verilmiş」の行為者は必須要素であり省略できない。それは能動動詞 vermek「与える」が、必ず被行為項と行為項のそれぞれの事項 domuz gribi「豚インフルエンザ」と Amerikalar「アメリカ人」を明示することを要求する動詞だからである。一方 MÖ1 の受動動詞 getirilmek「持って行かれる」では、明示する必要があるのは到達項 seviyeye「レベルに」であり、行為項 Çevre Bakanlığı「環境省」は背景化し得る。しかもこの場合、前に休止が置かれている。

³⁵ ERKÜ (1983)は背景化(backgrounding)と後からの思いつき(afterthought)は元来異なるものであり、ERGUVANLI が両者を同じものと捉えたことを批判している。しかし代りに ERKÜ が提唱する activated という概念が事実をより明確化したかと言えば、必ずしもそのようには思えない。ERKÜ (1983) 142-152 を参照。

³⁶ () は川口が補った内容。

先行研究ではほとんど触れられていないが、呼びかけの要素も述辞に後続する。表 14 を参照。

表 14 呼びかけ

	token	Type
1. 親族名	9	aabi (6), abla (3)
2. hoca	8	hocam (6), Selçuk hoca (1), ³⁷ Selçuk hocam (1) ³⁸
3. その他	5	Mert (1), sayın seyirciler (1), ³⁹ sevgili Yusuf (2), ⁴⁰ Yusuf (1)
合計	22	

AA57- *o* o konuda da ciddi problemler var {aabi (ağabey)}

AA57- その、その点でも深刻な問題があるよ {兄さん}

表 15 手段格

-(y)le/la	token	Type
1. 無生物名詞	10	durumlarla (1), ihtimalle (3), trenle (1), zamanla (1), etc.
2. 生物名詞	6	ailesiyle (1), arkadaşlarımla (1), herkesle (1), kardeşinle (1), etc.
3. 程度	3	kadarıyla (3)
合計	19	

表 16 所有格

-(n)in/in/un	token	type
1. 代名詞	9	bunun (2), bunların (1), benim (3), bizim (1), onun (1), senin (1)
2. 無生物名詞	4	Kanada'nın (1), şarkılarının (1), triicinin (1) ⁴¹ , yükseldiğinin (1) ⁴²
3. 生物名詞	4	adamin (1), akademisyenin (1), çocuğun (1), insanların (1)
合計	17	

直接限定目的格や主語代名詞のところで指摘したのと同様、所有格をとる述辞後続要素には代名詞が多い。このことは後続要素が、既に先行文脈で言及されたか含意されたことを意味する。次の AD50 は典型的な例と言えよう。

³⁷ hoca だけを要素とすることも可能。

³⁸ hocam だけを要素とすることも可能。

³⁹ seyirciler だけを要素とすることも可能。

⁴⁰ Yusuf だけを要素とすることも可能。

⁴¹ 3G'nin の意。

⁴² 動名詞-dik-を含むため-dik-としても分類可能。

AD50- # Kanada'nın aksanı yaani Fransızcası farklı {**Kanada'nın**}

AD50- # カナダの訛りは、つまりフランス語は違ってる {カナダのは}

MÖ3 - # ee para bulabilmesi için de # iyi projeler # gi(.) yaani yetkin projeler sunması laazım ee {**akademisyenin**} <*evet*>

MÖ3 - # え〜と、研究費を見つけるためにも # 良い研究計画を # gi(.) つまり練られた計画を提示する必要がある え〜と {研究者は} <そうね>

MÖ3 の発言では、会話のテーマが「大学での研究について」であるため、akademisyen「大学の研究者」は含意されている情報である。

表 17 間投詞

	token	type
1. ya	8	ya (8)
2. işte	6	büyük gemilerde işte (1), işte (5)
合計	14	

表 18 動名詞

	token	type
1. -diğ/tiğ/duğ	5	beklediğimizi (1), gösterdiği (1), olduğunu (2), ürettiğini (1)
2. -an	2	anlaşılan (2)
合計	7	

最後に動名詞の場合について説明しておく。AA17 と AD17 の以下のやり取りでは、AA17 が通訳という学問分野は困難であると言っている。そして次にそれを受けて、AD17 は述辞の後に{zor olduğunu}「難しいことに」と付け足している。

AA17- her şeyi bilmek laazım tabii ki yaani bu # <aslında **zor bi(r) branş**> çok geniş bi(.)

AD17- ki <çok geniş> çoğu insan bunun farkında değil {**zor olduğunu**} # yaa tercüman iki dili de biliyo(r) çeviriyo(r) (...)

AA17- なんでも知らないといけない、もちろん、これは # <ほんとに難しい分野だ> ととても広い bi(.)

AD17- でも<とても広い> 多くの人は気づいてないよ {難しいことに} # そう、通訳は2言語ともわかって、翻訳して (...)

次の ES と NE は翻訳の話をしている。まず翻訳業は「あまり知られていない çok yaygın bir şey değil」と述べる。だから翻訳家になりたいと人に言っても、「何それ ne o」と言われて

終るのが落ちた。この言葉を受けて、翻訳家というのは「どういうものなのか *ne demek olduğunu*」人にはわかってもらえないと続く。後続要素は先行文脈に現れた情報を表しており、背景化されても相互理解に支障が生じるようなことはない。

NE41- (...) # çevirmenlik bizim toplumumuzda çok yaygın bir şey değil işte e ne olucaksın (olucaksın) diyorlar işte ben tercüman olucam (olacağım) diyorsun

ES43- *ne o* diyorlar (!)

NE42- bilmiyorlar {*ne demek olduğunu*}

NE41- 翻訳業は我々の社会ではあまり知られていない、そう、え〜と、君は何になるつもりって言われ、「僕は翻訳家になりたい」なんて言うよ

ES43- 何それって言われるよ (!)

NE42- 人にはわからないから {*どういうものなのか*}

次の FD47 でも、いろいろな学部に行くと言っていることから、それが学生たちの行動であることは、もはや前景化する必要のない情報と言える。

FD47- # öbür tarafta *teknik eğitime bakıyo(r)sun {öyle}* # *eğitim fakültesine bakıyo(r)sun {öyle}* # *fen-edebiyata bakıyo(.)* # yaani bunların hepsinde benzer davranışlar var {*öğrencilerin gösterdiği*} ##

FD47- # ほかに工学部の教育を見てごらん {あんな風だし} # 教育学部を見てごらん {あんな風さ} # 文理学部を見て(.) # で、これら全部で似た行動がある {学生たちが見せる} ##

6. 結論にかえて

先行研究で繰り返し述べられてきたことであるが、背景化された述辞に後続する要素は強勢を持たず、疑問詞や疑問辞の *mi* が後続要素になることはない。⁴³ 疑問のイントネーションが観察された後続要素は全部で 47 例あった。しかしながら確かに述辞に疑問詞 *kim* 「誰」が後続する **Kaya'yla evlendi kim?* 「*カヤと結婚したのは誰？」のような例は見られなかった。

述辞後続要素は必ずしも背景化の機能を担うとは限らない。このことも複数の先行研究が指摘するところである。⁴⁴ たとえば *Kaya'yla kim evlendi?* 「カヤと誰が結婚したの？」に対する答えは、*Kaya'yla Oya evlendi.* 「カヤとオヤは結婚した」あるいは *Oya Kaya'yla evlendi.* 「オヤはカヤと結婚した」のいずれかになる。これらの答えでは背景となる *Kaya'yla* は、発話の焦点である *Oya* の前に出るか、焦点と述辞の間に現れる。つまり述辞に後続する位置だけが背景化された要素の現れる場所ではないということである。

⁴³ KILIÇASLAN (2004) 728.

⁴⁴ HOFFMAN (1995), KILIÇASLAN (2004) 728-729, GÖKSEL and KERSLAKE (2005) を参照。

同様の理由で、我々は「全ての述辞後続要素は背景化されている all postverbal ones are backgrounded」という主張を俄かに認められない。それは 5.1. で述べたように、発話の焦点の真実性を強調したり、話者等の視点を明示したり、例示をするために、特定の副詞を述辞後続要素として用いるからである。これらの副詞は背景化と関係があるというよりは、発話の焦点に対して、主観的な評価や情報を付加するために用いられる。すなわち「発話の焦点をさらに絞り込む」という役割を担っている。背景化という現象が「発話の焦点から背景へのズームアウト」であるとすれば、これらの副詞は「発話の焦点へのズームイン」とでも呼べるような働きをする。

本稿では背景と呼ばれる部分に 2 つの異なる働きを認めたい。1 つは焦点からズームアウトする、単なる背景を表す場合で、もう 1 つは発話者の観点から焦点に向かってズームインする働きである。これによって相手は発話の焦点に、より意識的に注意を向けるようになる。興味深いことだが、発話の焦点あるいは述辞に相手の注意を引きつけるという働きは、要素を述辞に後続させる背景化に内在するものと考えられる。

Kanserdir onun ölümüne sebep. 「癌でした、彼が亡くなった原因は」

Var mı bana yan bakan? 「いるの、僕のことを白い目で見ている人？」⁴⁵

EDISKUN が指摘するように、最初の例は「死因が癌である」ことに疑いがないと強調し、2 番目の例は「(そんな人が) いるかどうか」が問題であり、発話相手の注意を述辞-dir 「～である」と var mı 「いるのか」に向けさせる働きがある。5.1. で述べた副詞の例も、発話の焦点の真実性、話者の視点、あるいは例示へ相手の注意を引きつけている。2 のところで挙げた例をもう一度改めて見直してみよう。

A. Kaç kişi geliyor? 「何人来るの？」

B. Üç buçuk mu demeli, bir tane de ufak çocuk. Antalyada evinde kaldığımız aile. Onlar İstanbula geldi Bayrama, yarın gidiyorlar.

「3 人半って言わないとね、1 人は小さな子だから。アンタリヤで家に泊めてもらった家族よ。彼はイスタンブールに来たの、お祭りにね、明日帰るわ」⁴⁶

この場面では、B の発話者は彼らがイスタンブールに来たことを重要な情報として相手に知らせている。述辞の後に「お祭りに Bayrama」を配置したのは、それが背景の情報だからではなく、新たに祭りという目的を情報として追加するためである。既知の情報である「彼ら onlar」は、新情報である「イスタンブールに来た İstanbula geldi」の主題を表しているが、さらに新たに「お祭りに Bayrama」を追加したのはなぜなのか。この述辞後続要素は、「イスタンブールに来た」と「明日帰る」ことを連結している。すなわち「イスタンブールに来て、明日帰る」という一連の新たな情報をより円滑に連結させるために、イスタンブールに来た目

⁴⁵ いずれも EDISKUN (1999) 368 の例。

⁴⁶ ERGUVANLI (1984) 63.

的に相手の注意を向けて、「お祭りに Bayrama」という要素を述辞の後に付加した。同様の談話的な効果は接続詞の *de* にも観察される。

AA141- evet korkunç bi(r) hızlı düşüş var {**or(a)da da**}

AA141- ああ、驚くほど（周波数は）速く下がるんだ {そこでもね}

AD20- a evet onu söyleyicektim (söyleyecektim) {**ben de**}

AD20- あ、うん、それを言いたかったんだ {僕も}

この場合、{*or(a)da da*}「そこでも」と{*ben de*}「僕も」は単なる付加情報ではなく、発話の焦点である *düşüş var*「低下がある」や *onu söyleyicektim*「それを言いたかった」をさらに詳細かつ鮮明に発話相手に印象づけている。

最後になるが、このように考えると、本稿の 5.1. でみた副詞にも類似した解釈が成り立つように思える。

ÇH16- insanlık ilişkilerini biraz zedeliyo(r) {**açıkçası**} <*hı hı*> bu açıdan kötü ama(...)

ÇH16- 「人間関係を少し傷つけるよ {本当言うと} <ふむふむ> この点で良くないけど (...)

AA23- eveet # zaaten Türkiye yabancı dil önemini yeni anlayan ülkelerden birisi o yüzden yaani biz son zamanlarda ağırlık verdik {*dile*} # yaani eğer vaktinde anlasaydık belki şu an daha fazla gelişmiş bi(r) ülke haline gelebilirdik {**bence**} ben bu şekilde düşünüyorum (...)

AA23- うん # それにトルコは外国語の重要性に最近気がついた国の一つで、だからつまり最近になって重要性を与えたんだ {言語に} # でももしもその時代に気がついていたら、たぶん今頃はもっとずっと発展した国の状態になっていたろうね {僕の考えでは} 僕はこんな風に考えている (...)

最初の例では「人間関係を傷つける」ことと「良くないことだ」をスムーズに結びつけるために、前者の真実性に注目させたのであろう。また 2 番目の例では、「発展した国の状態になっていたであろう」ことが発話者の考えであることを印象づけるために、まず *bence* を用い、直後に「僕はこう考えている」と再び繰り返したのである。

参考文献

- Aydemir, Yasemin (2004) “Are Turkish Preverbal Bare Nouns Syntactic Arguments?”, *Linguistic Inquiry* 35-3, 465-474.
- Blanche-Benveniste, Claire (2005) “L’Études grammaticales des corpus de langue parlée en français”, in G. Williams (dir.), *La Linguistique de corpus*, Rennes: Presses Universitaires de

Rennes, 47-66.

- Bozşahin Cem (2003) "Grapping and word order in Turkish", in A. Sumru Özsoy, Didar Kadar, Mine Nakipoğlu-Demiralp, E. Eser Erguvanlı-Taylan, Ayhan Aksu-Koç (eds.) *Studies in Turkish Linguistics*, Boğaziçi University Press: İstanbul, 95-104.
- Dizdaroğlu, Hikmet (1976) *Tümcebilgisi*, Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları.
- Ediskun, Haydar (1999) *Türk Dilbilgisi. Sesbilgisi – Biçimbilgisi – Cümlebilgisi*, 7. Basım, İstanbul: Remzi Kitabevi.
- Enç Mürvet (1991) "The Semantics of Specificity", *Linguistic Inquiry* 22/1, 1-25.
- Erguvanlı, Eser Emine (1984) *The Function of Word Order in Turkish Grammar*, Berkley/Los Angeles/London: University of California Press.
- Erguvanlı, Eser Emine (1987) "The role of semantic features in Turkish word order", *Folia Linguistica* 21, 215-227.
- ErkÜ, Feride (1983) *Discourse pragmatics and word order in Turkish*, Dissertation: University of Minnesota.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information Structure The Syntax-Discourse Interface*, Oxford: Oxford University Press.
- Gencan, Tahir Nejat (1979) *Dilbilgisi*, Gözden Geçirilmiş IV. Baskı, Türk Dil Kurumu Yayınları 418: Ankara, 1979.
- Göksel, Aslı (1998) Linearity, focus and the postverbal position in Turkish. In *The Mainz Meeting: Proceedings of the Seventh International Conference on Turkish Linguistics*, Lars Johanson (ed.) Wiesbaden: Harrasowitz Verlag, 85-106.
- Göksel, Aslı and Özsoy Sumru A. (2000) "Is there a focus position in Turkish?", In *Studies on Turkish and Turkic Languages*, Aslı Göksel and Celia Kerslake (eds.) Wiesbaden: Harrasotiwz Verlag, 219-228.
- Göksel, Aslı and Özsoy Sumru A. (2003) "dA: a focus/topic associated clitic in Turkish", *Lingua* 113, 1143-1167.
- Göksel, Aslı and Celia Kerslake (2005) *Turkish: A comprehensive grammar*, London: Routledge.
- Hoffman, Beryl (1995) *The computational analysis of the syntax and interpretation of "free" word order in Turkish*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Hoffman, Beryl (1995) "Integrating free word order syntax and information structure", In *Proceedings of the Seventh Conference of the European Chapter of the Association for computational Linguistics*.
- Hoffman, Beryl (1995) "Word Order, Information Structure, and Centering in Turkish", In *Centering Theory in Discourse*, eds. Marilyn Walker, Ellen Prince, and Aravind Joshi, Oxford University Press, 253-271.
- İşsever, Selçuk (2003) "Information structure in Turkish: the word order-prosody interface", *Lingua* 113, 1025-1053.
- Kawaguchi, Yuji (2009) "A corpus-driven analysis of -r dropping in spoken Turkish", *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, Y. Kawaguchi et al. (eds.) Amsterdam/Philadelphia: John

- Benjamins, 281-297.
- Kennelly Sarah D. “Quantification and information structure”, in A. Sumru Özsoy, Didar Kadar, Mine Nakipoğlu-Demiralp, E. Eser Erguvanlı-Taylan, Ayhan Aksu-Koç (eds.) *Studies in Turkish Linguistics*, Boğaziçi University Press, İstanbul, 2003, 203-213.
- Kılıçaslan Yılmaz (2004) “Syntax of information structure in Turkish”, *Linguistics* 42-4, 717-765.
- Koç, Nurettin (1996) *Yeni Dilbilgisi*, İstanbul: İnkılâp Kitabevi.
- Kornfilt, Jaklin (1997) *Turkish*, London: Routledge.
- Kornfilt, Jaklin (2005) “Asymmetries between pre-verbal and post-verbal scrambling in Turkish”, *The free word order phenomenon*, J. Sabel and M. Saito (eds.) Mouton de Gruyter, 163-179.
- Lewis, Geoffrey (2000) *Turkish Grammar*, Second Edition, London: Oxford University Press.
- Kural, Murat (1992) “Scrambling and mixed positions in Turkish”, *Proceedings of NELS 22*, 259-272.
- Kural, Murat (1997) "Postverbal constituents in Turkish and the Linear Correspondence Axiom", *Linguistic Inquiry* 28, 498-519.
- Nakipoğlu, Mine (2009) “The semantics of Turkish accusative marked definites and the relation between prosodic structure and information structure”, *Lingua* 119, 1253-1280.
- Slobin Dan I. and Thomas G. Bever (1982) “Children use canonical sentence schemas: A crosslinguistic study of word order and inflections”, *Cognition* 12, 229-265.
- Turan Ümit. (1998) “The prominence of entities and the forward looking center hierarchy”, In Ellen Prince, Aravind Joshi, and Marily Walker, (eds.) *Centering Theory in Discourse*, Oxford University Press, 139-160.
- Vallduví, Enric. (1990) *The information component*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.
- Yılmaz, Selim. (2006) “Présentation d’un corpus oral en turc contemporain”. 『言語情報学研究報告 12 コーパス言語学の諸相—話し言葉コーパスと書き言葉コーパス—』, 敦賀陽一郎, 三宅登之, 川口裕司 (編), 21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, 東京外国語大学地域文化研究科, 201-240.
- AntConc 3.2.1w (Windows), Laurence Anthony, Faculty of Science and Engineering Waseda University, Japan; anthony@waseda.jp.